

他海域と比較してわかる大阪湾の市民ネットワーク活動の先進性

総合科学(株) 海域環境部長 中 西 敬

Advanced aspects of network activities by townspeople in Osaka Bay compared with those in other bay areas. Takashi Nakanishi, (SOHGOH KAGAKU INC.)

私に与えられたミッションは標題のとおりなのですが、最後のスライドになると「先進性」というよりも「特異性」、他所と比べると少し違うというような結果になるのです。そのことをご紹介するに当たっては、いろいろな取り組みが各地で行われていることに対して、どのように大阪湾が違うのかということを、活動面での位置関係ということで話をさせていただきます。

大阪湾ですが、先ほども、役人らしからぬ役人さんと、先生らしからぬ先生方がお話をしていたように、やっぱりちょっと活動が他の場所と違うのです。その中でも、何回もお話が出てきました見守りネットというのが、大阪湾でいろいろな人たちが集まって活動しているわけですが、この組織を例に話を進めます。見守りネットの生い立ちを少し振り返ってみますと、最初は都市再生ということで、大阪湾を再生するという旗印が上がりました。そうしたところ、行政による再生推進会議ができて、そこに学識経験者の方々が集まって検討が始められたわけです。計画が作られたり、どこでどういうことをしようではないか、目標はどうしようなどという検討が進んでいきました。ところが、なぜか知らないうちに、こぶみみたいに「見守り」というのができて集まっているのです。私もその一員なんです。よく考えてみると、じつは見守りネットとして集まった人

たちには、ほとんど再生推進会議という意識はなかったようです。再生推進会議を前提にしてという意識は全然なくて、大阪湾が気になっている人たちが集まってなんかやっているという組織なわけです。でも仕組みとして表現してみるとこのように、少しこぶのような存在で始まったと言えるでしょう。

その次の段階でこの組織はさらに育っていくわけですが、育ち方がちょっと過激で、見守りだけではなく「ほっといたらあかん」と、田中先生からお話がありましたが「ほっとかれへんやないか」となりました。で、「ほっとかれへん」活動をしていると、学識経験者の方々も加わっていただいて活動が広がっていきました。でもこの時点

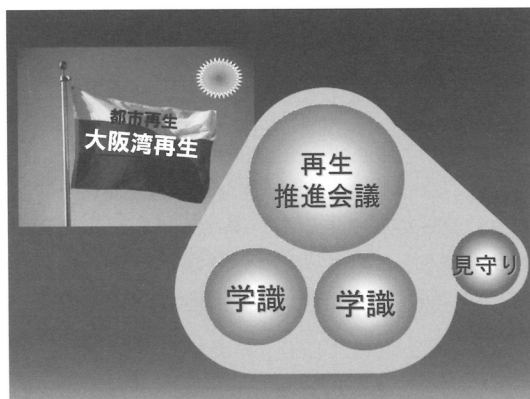


図1. 大阪湾見守りネットのおいたち 1.

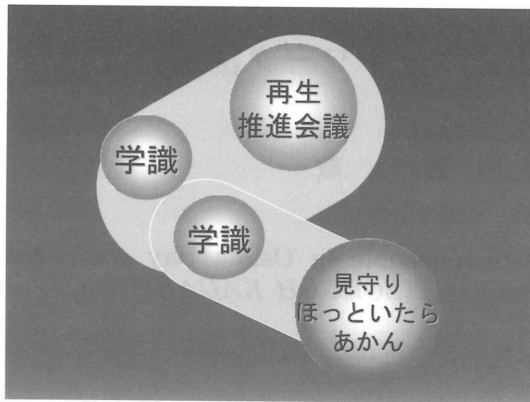


図2. 大阪湾見守りネットのおいち 2.

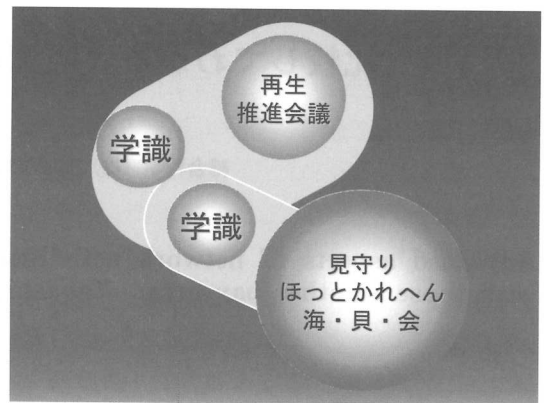


図3. 大阪湾見守りネットのおいち 3.

ではまだ、見守りネットに集まっている皆さんは再生推進会議という存在を意識していなかったといえます。

さらに組織が育っていくわけですが、見守り→ほっといたらあかん→ほっとかれへん、もっともっと活動しようとなり、西宮では海の貝をテーマに「海・貝・会」などという大阪のノリで集まってさらに活動が広がっていきました。ただ、活動と言ってもあまり拘束力はなくて、ふだんはそれぞれ大阪湾を囲んで独自の活動をしている人たちがグループが、たまに集まってみんなで意見交換をしたり、元気づけ合おうではないかという意識が、フォーラムに結集してくる原動力となっているのです。それを大阪市立自然史博物館、須磨海浜水族園、西宮と回を重ねてきて、その都度、つながりが広がってきました。そんな風に活動していると、いつの間にやら、見守りのボーダーがわからなくなってきました。学識の方も増えて、行政の方もさらに加わっていただき、実は再生推進会議の御旗のもとに始まった「見守り」であったのに、知らない間に「見守り」の方が勝手に旗を立てて、「大阪湾何とかしよし！」みたいな感じで今、活動を始めている。振り返ってみるとこれが「大阪湾見守りネット」の生い立ちなんです。ここで面

白いのは行政の枠組みに入っているようで入っていないような、不思議な存在として活動を続けてきているという所が大阪の先進性というか特異性としてあるのではないかと思います。

では、その先進性もしくは特異性を皆さんにお伝えすべく、行政・学識・市民の位置関係で三大湾（東京湾・伊勢湾・大阪湾）の再生活動を比較してみようと思います。ただし今から申し上げるのは誇張したところもあり、科学的根拠や統計に裏付けられたとかいう話ではまったくなく、感覚論であるということを予めお許しください。

まず東京湾（右）を見てみますと、私の感覚では「規則正しい」といえます。市民・学識・行政がきちっと関係を作っています。次に伊勢湾（中央）ですが、同じように3者がきちっと関係しているのですが、後ろに「T」という頭文字の企業が、どうも名古屋方面に行くとか何の活動にしても、見え隠れしているのです。これに対して大阪湾（左）は先ほど紹介したような位置関係ですね。これは感覚論ですが、でも何かこんな感じがあると思います。

次に「行動特性」をみていきます。東京方面では、私の感覚でみると、ルールを作って行動しようとしています。やはり東京は国の中心に近いですか

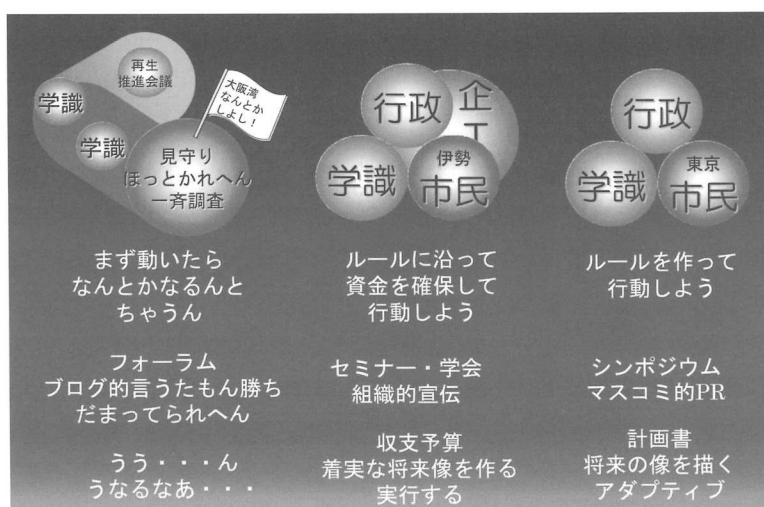


図4. 三大湾における再生活動の比較.

ら、「法を作ったらどう」とか、「ルールを作ってはどう」とか、そしてその上に立って行動しようとするのですね。伊勢湾の辺りの人はルールを作って、ちゃんと資金を確保して、淡々と行動します。大阪湾の場合は、「まず動いたら何とかなるんちゃうん」という感覚で動いているというのが実感ではないかと思います。

行動していると情報を発信しますが、この面での特性も感覚的にはかなり違うのです。東京湾ではシンポジウムなどをきちんとやります、大きな会場を準備してPRもしてきちっと開催します。それと併せてマスコミがそれをとりあげたりします。マスコミ的PR、行政も組んでしっかりした連携の中で情報が発信されているという感じです。伊勢湾では、セミナーとか、少し学会的なイメージが強いと感じます。組織的な宣伝をされます。それでマスコミ的PRに対して、たとえばT社が入ると情報発信という文言が宣伝というふうに変ったりします。これに対して大阪湾は「だまってられへん」、あるいは「ブログの言うたもん勝ち」です。みなさんぜひお帰りにになったらインター

ネットで「見守りネット」を検索してみてください。そこに登録すると誰かが勝手に「こんなことあったで」と、先ほどの田中先生のお話のように「ウミガメおったで」とか、夏場に「〇〇で青潮でたで」、「ここも出たで」、「明日出るかも知れへんで」などと情報が流れるのです。

最後に「どないすんのやろ」ということを考えてみました。将来設計を考えたときに、東京湾では将来像を描いた計画書が作られます。アダプティブ（順応的管理）という言葉が流行っています。将来どうなるかわからないからそのときにはフィードバックして順応的に管理していくというシステムで将来像が描かれています。かっこいいですね。伊勢湾では、収支予算書を作ります。そして着実な将来像を書いて事業を実施します。海の環境改善をする事業で国土交通省の港湾部門では「シーブルー」という事業があるのですが、全国的に見ても伊勢湾では突出して予算が運用されて事業がきちんと進んでいると聞いています。大阪湾では、矢持先生のご提案にあったような方向に進んでいるかなあかんのやろなあと思ったり、でも何も考え

ずに進むほうがええのとちゃうやろかとか思ったりしているところなのです。ということで、将来設計を考えると大阪湾では「うう・・・ん、うなるなあ・・・」となります。今から考えていかなあかんということでもあります。滅茶苦茶に感覚的な話で恐縮ですが、大阪湾をみんなで囲んで何か

する気持ちだけはあって、動いていきたいし、いけたらいいと思いますし、それに対して矢持先生がおっしゃるように、どんどんいろんな主体が加わって、ひろげていけたらいいのではないかな、と思っています。